

宮崎汎会員が見た世界の旅第2部人物編第38話

ゲルニカを追って スペイン

「ゲルニカ」はピカソの描いた大作である。1937年スペインは内戦下にあった。フランコ率いる反乱軍を支持していたナチスがバスク地方にある町ゲルニカを爆撃し、罪なき多くの人々が断末魔の悲鳴をあげながら犠牲となりそして町は壊滅した。諸国は当然のことながらフランコとヒトラーに対し非難の声を上げた。ピカソは蛮行に対し激しい怒りを覚えながら大作ゲルニカを描いたのだ。

ゲルニカはパリ万博のスペイン館に掲げられたが、内戦はフランコ反乱軍が勝利しフランコは自身の存命中はスペインにゲルニカを持ち込むことを禁じた。以来この絵は祖国を遠く離れたニューヨークの近代美術館に展示されていた。

話題の大作をいつか見たいと思ってアメリカ出張のチャンスを心待ちした。アメリカ出張を命じられ勇躍ニューヨークへ飛んだ。だが用務が多くて時間が割けなかった。2度目の渡米も会議が長引き美術館どころではなかった。

そして3回目のチャンスが巡ってきた。願いかなって心躍らせ近代美術館に赴いた。ところが入館しゲルニカをいくら探しても無いのである。係員に尋ねたところ、あの絵はスペインへ帰ってしまったので、もうここには戻ってこないというのである。そんなわけでゲルニカには縁がなかったのかとがっかりして半ばあきらめていた。



スペイン・プラド国立美術館

定年を迎え仕事から解放された。家内がスペインへ行ってみたいといった。そして首都マドリッドのプラド美術館でやっとゲルニカに対面できたのである。想像していたより大きな絵である。

モノトーンで描かれた絵はすさまじい迫力で迫り、人間の悲鳴や嗚咽、牛馬のけたたましいなきが聞こえてきそうな絵であった。絵を見ている大勢の人たちは黙し、怖い目で絵を凝視していた。

パブロ・ルイス・ピカソは（1881年～1973年）スペインアンダルシア地方のマラガで生まれ母方の姓ピカソを名乗った。幼児時代から絵画に秀で、美術工芸学校の教師であった父親を驚かせ、息子の才能に圧倒された父親は以後自身で絵を描くことを止めたといわれている。

14歳の時バルセロナに移り美術学校を受験するが初級をパスし、上級クラスに挑戦し見事合格した。もはや学ぶものが無かったという。次いで王立美術学校に入るも体を壊しバルセロナに戻る。



メトロポリタンにて

1900年パリに行く。ドラクロア、アングルなど多くの友人を得て、多大な刺激を受けている。

1901年マドリッドで雑誌“若き芸術”の編集に携わり“青の時代”を確立。

1904年からパリモンマルトルに定住し食欲なまでに多くのものを吸収する。様々な人たちから受ける刺激で画風は大きく変化していく。

ピカソの画風は生涯にわたりその都度変化を遂げてきているが、その時々の変化は、“青の時代”（1901年～1904年）、バラ色の時代、アフリカ彫刻の時代、キュビズム＝新古典主義の時代、シュルレアリス＝超現実主義の時代（1925年～1936年）と変化するごとにそれぞれ名付けられている。

またピカソはプラド美術館の館長に就任したり、フランス共産党に入党したりしている。

余談であるが嘘か真か1911年パリのルーブル美術館の至宝レオナルド・ダ・ヴィンチのモナリザが盗難に遭った時、その容疑者としてピカソが逮捕されたが疑いはすぐ解け釈放されたと小耳にはさんだことがある。ちょっと出来過ぎた面白い話ではある。

下世話な話だがピカソの絵画は1枚100億円を優に超す高値のものもある。また生涯多くの女性との艶聞があったことはよく知られている。ピカソは絵画のみならず彫刻・版画・陶芸などにも才能を遺憾なく発揮した20世紀の怪物の一人であろう。



サグラダ・ファミリア



グエル公園のトカゲ

ピカソの過ごしたバルセロナにはアントニオ・ガウディ（1852年～1926年）の作品がそこここに点在する。今も建設が続くサグラダ・ファミリア大聖堂があるし、グエル公園にはカラフルなトカゲの彫刻がある。天皇陛下が皇太子時代にスペインを訪れ、これを見ていたく興味を持たれたとガイドから説明

があった。

かつてのスペインの首都トレドは周りをタホ川に囲まれた中世の面影濃い古都である。ここはスペイン内戦の地でもあり、またトレドにはギリシャ人の画家エル・グレコが住みついた地でもある。



エル・グレコ（1541年～1614年）はギリシャのクレタ島の生まれであるが、ここトレドに住み没した。グレコとはイタリア語でギリシャ人の意である。本名はドミニコス・デオトコプロスであるが、本名では呼ばれずエル・グレコで通っている。

トレドにはグレコの描いた有名な「オルガス伯の埋葬」の絵がサント・トメ教会に飾られている。この絵を目当てに世界中から観光客が押し寄せている。

エル・グレコ邸
スペイン・トレド
グレコ無原罪の御宿り
サンタクルス美術館
一枚の絵がこんなにも多くの人々を引き付けるものなのかと思うほどの人ばかりであった。

プラド美術館にも、ここトレドにもエル・グレコの絵は多い。絵はエンジ色、黄色、紫色が多く使われ素人目にも何となくこれはグレコの絵だと判るような気がする。

宮廷画家ベラスケスの代表作は、ラス・メニーナス（宮廷の侍女たち）であるがピカソも1957年に同名の絵を描いている。バルセロナのピカソ美術館にある。

ディエゴ・ロドリゲス・デ・シルバ・イ・ベラスケス（1599年～1660年）は、スペインを代表する画家である。南部地方のセビーリャに生まれる。1623年伯爵の仲介でフェリペ国王に面識を得て国王に気に入られ、以後30年間にわたって破格の待遇を受けながら宮廷画家として過ごす。

18歳の時セビーリャの画家組合の試験に合格し職業画家となる。29歳の時スペインにやってきたルーベンスと親交を結んだ。30歳には国王の許しを得てイタリアのヴェネツィアやローマへ行く。48歳2度目のイタリアへ行き美術品の収集活動を行う一方自身でも傑作を製作している。帰国後は王室の責任ある地位に上り詰め役人としても大きな成功を収める。一方絵画では多くの傑作をものにしていく。57歳の時ベラスケスの最高傑作であるラス・メニーナス＝女官たちを描く。60歳の時、フェリッペ国王の特別の計らいでサンティアゴ騎士団員となる。61歳で没した。



ベラスケス・教皇イノケンティウス十世
ローマ・ドーリアバンフィーリ美術館



ベラスケス・裁縫する婦人
ワシントン・ナショナルギャラリー

スペインにはベラスケスと並ぶ巨匠がいる。フランシスコ・デ・ゴヤ（1746年～1828年）である。長い苦勞の末43歳で華やかな宮廷画家となる。78歳でフランスに亡命しボルドーで82

歳の生涯を閉じた。

マドリードのプラド美術館に並んで展示されている“裸のマハ”と“着衣のマハ”はまったく同じポーズの絵であるが、絵の発注主は当時のスペイン首相である。絵が描かれた時代は裸体画は禁じられていたので表向きは着衣、裸体画は密かに楽しんだのではないかといわれている。



ゴヤは大病を何度か患い結果聴覚を失い、晩年74歳の時自宅に引きこもり人間の死をテーマに「黒い絵」と呼ばれる暗い闇の世界に落ち込みおどろおどろした色彩に乏しい絵を描いた時代があった。この時代の絵は自宅の壁に描かれた。同じ画家が描いたものとは思えない絵だ。二人の妖術師、巨人、サトゥールヌスなど見るものにすさまじい印象を与える。

スペインにはこのほかにも中世の画家ムリーリョやスルバラン、髭に特徴のある剽軽な顔つきのサルバトーレ・ダリなどよく知られた画家がいる。

ゴヤ・バルコニーのマハたち

ニューヨーク・メトロポリタン美術館